

バードリサーチ ニュース

2013年3月号 Vol.10 No.3



Carduelis flammea
Photo by Toshifumi Moriya

参加型調査

気温で初認時期を予想できるか？

～ キビタキ初認調査 ～

高木憲太郎

キビタキ前線

東京の桜の開花は、観測史上最も早かったようですが、今年の春は、全国的に早くやってくるようです。先週末は花見に行かれましたでしょうか？桜の開花予想日については、桜前線と呼ばれる地図が作られています。キビタキの繁殖地での初認日は、比較的きれいに南から北へ北上していく様子が捉えられていますので、桜と同じような前線の図が作れるのではないかと考えていました。調査を始めて4年が経ち、データが増えましたので、前線図を作ってみることにしました。方法は「季節前線シギチドリ (<http://bird-research.paslog.jp/article/2523144.html>)」でやっている方法と同じです。4月1日を1として、初認日を数値化します。そして、それをもとにGISを用いて等高線図を作ります。桜前線で使われるソメイヨシノは遺伝的に同一ですが、鳥たちは、1羽1羽が違う遺伝子を持っています。渡り鳥の中には年齢によって繁殖地への渡来時期が違うといったことが研究されている鳥もいます。理由はわかりませんが、キビタキでも、隣接した場所で繁殖する個体の中で、早い個体もいれば、遅い個体もいる状況です。なので、もう少し、前線を描くテクニックは磨かないといけないと思いますが、それでも、4月25日と4月30日の渡来前線を描くことができました(図1)。線の位置の良さ悪しはあると思いますが、年による違いがこうして地図になると楽しいですね。バードリサーチニュース2012年7月号でご報告した結果の繰り返しになりますが、2010年と2011年が比較的遅く、2009年と2012年が比較的早い傾向が地図からも読み取れます。特に、2009年は4月25日以降に北上が進んだ後半型だったのに対し、2012年は4月25日の時点で東北まですでに北上していた前半型だったことがわかります。



図1. 繁殖地での初認日が4月25日と30日の前線。4年分を示しているが、2011年は4月30日の前線しか描くことができなかった。

気温で初認時期を予測できるか？

いつ越冬地を発つのか、そこには、日本の気候は直接関係しないはず。一方で、日本に渡来した後、鳥たちが気候を見極めながら少しずつ北上している、としたら日本の気候も関係するかもしれません。この調査では、4月8日前後に九州の繁殖地で初認されるのが最初のことが多く、2011年を除くと、3年間はほとんど同じでしたから・・・などと想像を膨らませながら、キビタキが北上する4月の気候を調べてみました。使用したデータは、気象庁がホームページで公開している気象統計情報です。気温、降水量、日照時間・・・、関係ありそうな項目をいくつか調べた中では、気温にキビタキの初認時期と合致する特徴がみられました。4月中下旬頃の西日本の日平均気温が、2009年と2012年はその間の2年よりも2～5℃ほど高かったのです(図2)。

今年も、気温とキビタキの初認の早さは一致するでしょうか？4月中下旬の日平均気温にご注目ください。

■参考Webサイト: 気象庁 気象統計情報
<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>

キビタキとオオルリどっちが早い？

間もなくキビタキが渡来する季節です。今年も調査へのご参加、よろしくお願いたします。今年も、キビタキと同じヒタキ科の鳥で、同じように鮮やかな色彩と澄んださえずりで人気の高いオオルリの初認も情報を集めようと思いません。黄色が早いのか？青が早いのか？結果は如何に？

■キビタキとオオルリの初認情報は、ぜひ、こちらへ！
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/kibitaki/index.html

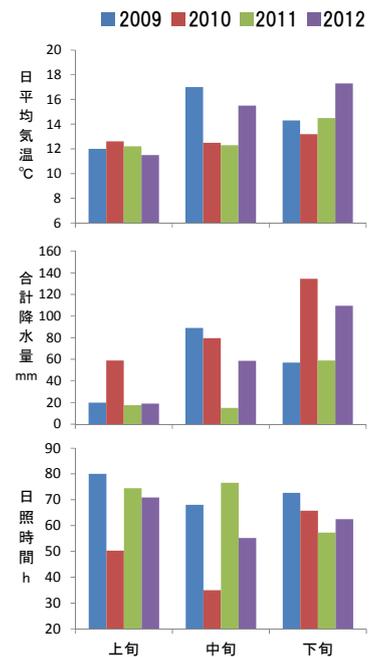


図2. 山口県の気象台で観測された4月の旬別の日平均気温、合計降水量、日照時間の年による比較。

レポート

雑木林管理の鳥類への影響
～都市近郊緑地での例～

バードリサーチ嘱託研究員 藤田薫

雑木林と生物多様性

2010年に愛知で行われたCOP10(生物多様性条約締約国会議)で「里山」の多様性が注目され、林を管理することの重要性が再び認識されるようになりました。1960年頃まで日本の二次林では低木や草本の除去、定期的な高木伐採などが行われていましたが、化石燃料や化学肥料が使われるようになると雑木林には経済的な効果がなくなり、管理は行われなくなりました。その結果雑木林に特有の生物が絶滅の危機に瀕しています(環境省 2012)。

たしかに、雑木林管理は林床植物の多様性増加に効果があるという報告が多いです(例えば、細木ほか 2001, 島田ほか 2008), そのような植物に依存する昆虫も影響を受けます。では、鳥に対しても効果はあるのでしょうか? 文献を調べてみると、鳥の多様性は階層構造の複雑な林の方が大きいという報告が、日本の林についてだけでもたくさんあります(例えば、Hino 1985, 石田 1987, 由井・鈴木 1987, 森田・葉山 2000)。そうすると、林を管理して単純な構造にした場合、鳥の多様性は減ってしまいそうです。

管理した林の鳥の多様性は?

横浜市では1990年代から市民グループによる1~2ha程度の雑木林管理が盛んですが、そのうちの1箇所を調べてみました。管理した林は草本層と高木層の2層、その隣の管理していない林(常緑樹が混ざった落葉樹林)は低木層も含めた3層が発達しています(図1, 藤田ほか2011)。繁殖期3シーズンと冬期2シーズンに種数を比較した結果、全シーズンとも管理していない林の方が多かったことがわかりました(図2)。多様度も同様の結果でした。管理した林にだけ出現した鳥は、冬期には4種、繁殖期には該当種はありませんでした。そこで繁殖期の個体数をみると、管理林の方が多いのは、ほとんどが、市街地でも繁殖す

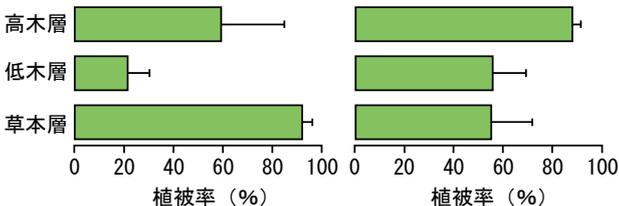


図1. 管理している林(左)と管理していない林(右)の植被率。グラフは藤田ほか(2011)より転載。

る鳥でした(表1)。一方、管理していない林にだけ出現したのは繁殖期に13種、冬期に7種で、この中には神奈川県レッドデータ種が8種含まれていました。これらの結果から、低木除去によって森林構造を単純にすると、市街地にも生息する鳥が増え、森林性の鳥、特に希少種が減少することがわかりました。

表1. それぞれの林にのみ出現した種。藤田ほか(2011)より作成。

管理した林		管理していない林	
繁殖期*	冬期	繁殖期	冬期
なし	ハクセキレイ	トビ	アオゲラ
	モズ	オオタカ●	ルリビタキ
	ホオジロ	ホトギス	エナガ
	カワラヒワ	アオゲラ	ヤマガラ
		モズ●	クロジ●
		ヤブサメ●	ウン
		センダイムシクイ●	イカル
		キビタキ●	
		オオルリ●	
		エナガ	
		ヤマガラ	
		カワラヒワ●	
		ハシボソガラス	

● 神奈川県のレッドデータ種。神奈川県レッドデータ種は、繁殖期と冬期で異なる。

* 管理していない林よりも常に個体数が多かったのはコジュケイ、キジ、キジバト、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロ、ムクドリ。

どんな林が鳥の多様性に適しているか

横浜では、林を管理すると、鳥の林での多様性(α多様性: その場所の多様性)が低下しました。冬期には管理林にだけ出現した種もあるので、β多様性(場所間の多様性)は少し増えたかもしれません。しかし、その地域全体の多様性(γ多様性)は、市街地にいた鳥が林内に入ってきただけなので、増えたわけではありませんでした。森林性鳥類や多様性の保全には、樹種構成に偏りが無いことが(村井・樋口 1988), また、林床管理をあまり行わずに常緑樹などの侵入を促すことが(一ノ瀬・加藤 1999)効果的です。アズマネザサ等の単一種が林床を被ってしまうのも、管理のしすぎも良くないようです。昔のように、雑木林がもっと広くなり、様々な状態の林がモザイク状になると、管理林のα多様性は高くなるかもしれません。また、草地や湿地を近くに作り、そういう環境の鳥や、林と草地(または

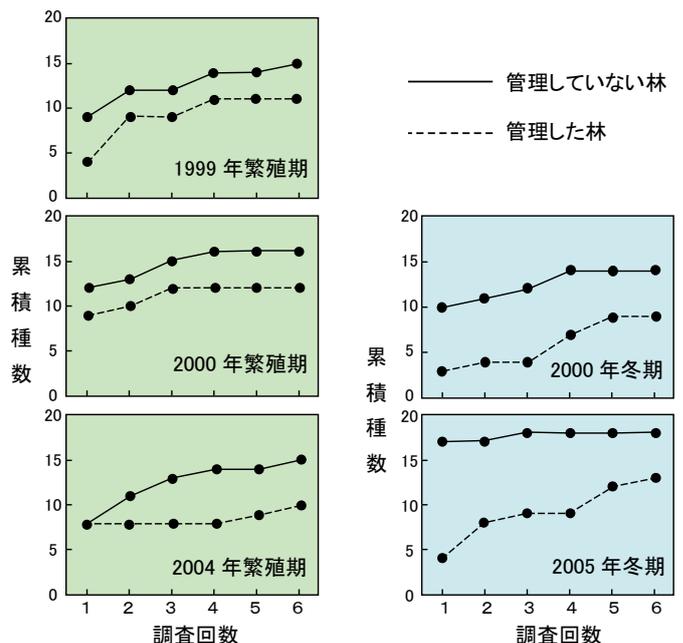


図2. 管理した林と管理していない林における出現鳥類の累積種数。藤田ほか(2011)より転載。

レポート

湿地)の両方の環境を使う鳥が来るようになると、 $\beta \cdot \gamma$ 多様性が高くなるかもしれません。

欧米と違って、日本では都市周辺部(郊外)よりも森林の鳥の多様性が高い(Mikami & Mikami 2012)ため、森林の多様性保全は重要です。どのような管理が鳥の多様性や種の保全に効果的なのか、日本全体の多様性を高めるのかを明らかにしていくためには、各地で行っている管理方法を記録し、多様性やそれぞれの種の変化をモニタリングして、その情報を出し合っていく必要があると思います。

引用文献

- 藤田薫・玉田知穂・篠原由紀子. 2011. 横浜自然観察の森における雑木林管理の鳥類への影響. BINOS 18 : 1-6.
 環境省. 2012. 生物多様性国家戦略2012-2020. 環境省自然環境局.
 Hino, T. 1985. Relationships between bird community and habitat structure in shelterbelts of Hokkaido, Japan. Oecologia 65:442-448.
 細木大輔・久野春子・新井一司・深田健二. 2001. 都市近郊林の林床管

- 理の有無による植生と環境の特徴. 日本緑化工学会誌 27 :14-19.
 一ノ瀬友博・加藤和弘. 1999. 武蔵野台地および狭山丘陵の樹林地における鳥類の分布と植生の種組成の関係について. ランドスケープ研究 62: 577-580.
 石田健. 1987. 植生断面図によって評価した森林の空間構造と鳥類の多様性. 東京大学演習林報告 76: 267-278.
 Mikami, O. K. & Mikami, K. 2012. Structure of the Japanese avian community from city centers to natural habitats exhibits a globally observed pattern. Landscape Ecol Eng. DOI 10.1007/s11355-012-0201-8.
 森田健吾・葉山嘉一. 2000. 丘陵地の植生構造が繁殖期の鳥類に及ぼす影響について. ランドスケープ研究 63: 505-508.
 村井英紀・樋口広芳. 1988. 森林性鳥類の多様性に影響する諸要因. Strix 7: 83-100.
 島田和則・勝木俊雄・岩本宏二郎・齋藤修. 2008. 東京都多摩地方南西部におけるコナラ・クスギ二次林の群落構造および種数の管理形態による差異. 植生学会誌 25: 1-12.
 由井正敏・鈴木祥悟. 1987. 森林性鳥類の群集構造解析4繁殖期群集の林相別生息密度, 種数および多様性. 山階鳥研報 19: 13-27.

研究誌 Bird Research より

● 今月の新着論文

今月は2本の論文が受理となりました

三上修ほか. 2013.

日本におけるスズメ個体数の減少要因の解明: 近年建てられた住宅地におけるスズメの巣の密度の低さ.

Bird Research 9:A13-

最近の住宅は、断熱効率が良くなり、冷暖房が少なくてすむようになって「地球にやさしく」なった反面、人家に住む動物にとって「やさしくなくなった」ともいわれています。たとえばツバメが巣を壁につけにくくなったり、スズメが巣をつくる隙間がなくなったり…。こうしたことはよく言われている反面、本当なのかは検証されていませんでした。そこで新しい住宅地と古い住宅地でスズメの営巣密度を比べたのがこの研究です。岩手と埼玉で調査した結果、そのどちらとも、新しい住宅地よりも古い住宅地の方が数倍多くスズメが繁殖していることがわかりました。

三上修・三上かつら. 2013.

インターバル撮影によるアリスイの給餌活動記録.

Bird Research 9: S1-S6.

巣への出入りを調べるのにビデオカメラが良く使われます。ビデオ録画は出入りの状況を正確に把握できる点ではすぐれているのですが、再生を一時停止させても、クリアな画像が得られない点が欠点でもあります。最近のデジタルカメラにはインターバル撮影機能がついているものがありますが、その機能を使ってアリスイの巣を撮影したのがこの研究です。論文に掲載されている以外の写真も見せていただきましたが、クリアな画像は見ているだけでも楽しく、研究上のヒントも得られるように感じました。【植田陸之】



写真. 餌を運ぶアリスイ.

お知らせ

すぎちゃん(植田理事長命名)こと杉本寛です。ご存知でない方も多いと思いますが、昨年9月から今年3月末までカワウ専属の嘱託研究員として、ご縁あって、勤務させて頂きました。今回は餞別としてニューズレターの枠を頂いたので、カワウへの思いとお礼を交えて書きたいと思います。

実は私、鳥についてほとんど知識がありません。これまで生態学をかじったことはあるものの、フィールドに出て調査をした経験はなく、カワウって何？から始まりました。加藤さんは「ウ〜ちゃん」とどのカワウも等しく愛し、高木さんは「この子は女の子だよ、可愛いから」と見分けてしまう。私自身は最初の頃はドラゴンみたいでカッコいいと思っていましたが、2月頃にバンディングに参加し、間近で見ると素朴で



写真. 杉本さん. 理科教員としてがんばってください!

その体温と鼓動を感じると愛着がわいてきました。また、ちょっと臆病で、食欲旺盛なところが私と似ています。

カワウの業務を通して多くの人と出会い、たくさんの経験が出来たこと、そして活発な議論のできるとも良い職場環境で仕事ができたと本当に幸せに感じています。今後は静岡市の中学・理科教諭となりますが、ここで得た経験を存分に生かしたいと思っています。ありがとうございました。

ハクガン 英: Snow Goose 学: *Anser caerulescens*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長: 36-45cm 翼開長: 68-80cm
 翼長: ♂ 756mm ♀ 729mm
 尾長: 115-140mm
 露出嘴峰長: ♂ 59mm ♀ 56mm
 ふ蹠長: ♂ 96mm ♀ 90mm
 体重: ♂ 2292g ♀ 1932g

※全長, 尾長はMowbray *et al.* (2000), その他はウランゲル島における著者らによる計測値(1992年7月)。

羽色:

白色型のハクガンと青色型のアオハクガンの二つの型(phase, morph)がある。白色型は, 初列風切だけが黒色で体全体が白色であり, 青色型は, 頭部と頸上部だけが白色で他はほとんどが暗色である。嘴と足の色は, 両型ともピンク色である。白色型の幼鳥は全身が灰色で, 嘴と足も灰色味がかかる。青色型の幼鳥は体全体が暗色である。雌雄同色。



写真1. ウランゲル島の白色型成鳥。
[Photo by V.Baranyuk]



写真2. 青色型成鳥。
[Photo by 本間隆平]

鳴き声:

マガンと比べるとやや鼻にかかったような声で, 飛翔中はクォンクォンとよく鳴き交わす。

2. 分布と生息環境

分布:

地球上全体で約500万羽が生息していて, そのほとんどが北米大陸に分布している。繁殖地は北極圏のポーフォート海沿岸やハードソン湾沿岸のツンドラ地帯で, 越冬地は米国中南部からメキシコまでの広い範囲に及ぶ。アジアでは, 北極海に浮かぶロシアのウランゲル島で約9万羽が, またその対岸にあたるコリマ川下流域で小群が繁殖している。日本への定期的な渡来は明治初期以降途絶えていたが, 後述の復元計画の実施以降, 飛来数は次第に増えているものの国内の分布は極めて局地的である。渡りの時期には北海道の十勝川下流域やサロベツ原野などに飛来し, 秋田県八郎潟, 新潟県朝日池などで数十羽が越冬する。この群れの繁殖地は北東シベリアのツンドラ地帯と推定されるが, 詳細は不明である。

北米大陸中西部およびアジアに分布する亜種ハクガン (*A. c. caerulescens*) と北米大陸東部に分布する亜種オオハクガン (*A. c. atlantica*) があり, 日本に飛来するのはほとんど亜種ハクガンであるが, 亜種オオハクガンの

記録もある(星子 1997)。また, アオハクガンは主に北米大陸中東部に分布するが, 2006/2007年冬期に初めて2個体の飛来が確認され, 北海道, 山形県, 宮城県, 新潟県の各地の湿地を移動した(佐場野ほか 2012)。

生息環境:

北極圏ツンドラ地帯の繁殖地では, 繁殖コロニー(集団営巣地)を形成するのに適した北極海沿岸部や湖沼・河川に近い平坦な環境に生息する。しかし, 条件の厳しいウランゲル島では, 水辺から約30kmも離れた雪解けの早い高地にコロニーが作られる。越冬地では, ねぐらとなる湖沼や河川と, その周囲に広がる農耕地や草地などの採食地を併せ持つ開けた環境に生息する。

3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
繁殖システム:	越冬期		渡り		繁殖期		渡り					

一夫一妻で, ペアは生涯続く。家族の絆も強く, 通常2-3歳で子が番いを形成するまで親子関係が続く。繁殖コロニー内でもつばらメスが巣を作り, 抱卵し, オスは巣の周辺で警戒にあたる。

巣:

地面のくぼみに枯草や小枝を敷き, 大量の綿羽を加える。前年の巣を再利用することも多い。

卵:

産卵は5月末から6月中旬に行なわれる。産卵数は2~6, 平均4.2卵。卵サイズは長径約80mm, 短径約53mm。卵色は淡黄色または淡灰色にくすんだ白。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は約24日。ハクガンはガンの中でもヒナの成長が早く, 最終卵の孵化後, 家族群は採食に適した水辺に移動し, いくつかの家族群と合流して大きな群れを作り, ヒナの成長を待つ。

渡り:

親鳥は7月末から風切羽の換羽が始まり飛べなくなるが, 8月中旬には幼鳥と時期を同じくして飛べるようになる。家族群は大きな群れで9月初旬に繁殖地を離れる。北米大陸で繁殖する個体群は, ほぼ南北方向に移動し, 冬期には北米大陸中南部で越冬する。ウランゲル島およびコリマ川下流域で繁殖する個体群は, 冬期に北米大陸に渡って大陸西部で越冬することが標識調査や衛星追跡による結果から明らかにされている。日本国内へは, 家族群が合流した群れが, 例年, 10月初旬に北海道に飛来し11月末に本州の日本海側に移動し越冬する。春期には, 逆のルートで北上する。



写真3. 成鳥2羽, 幼鳥4羽の家族群。
[Photo by 野呂一則]

4. 食性と採食行動

植物性。繁殖地では、イネ科、スゲ科、トクサ科の葉や根茎部、ツンドラ地帯の低木やベリー類を、越冬地では農作物の地下茎、落ち穂、イネ科の雑草、牧草、水生植物などを採食する。

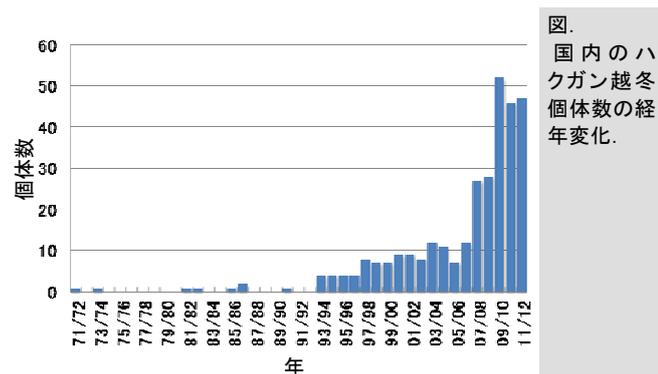
5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 東アジアにおけるハクガン復元計画

国内では希少種であるハクガンも100年ほど前まではマガンと同様に普通に日本へ飛来していた(Takekawa *et al.* 1994)。白く目立つことや、強い集団性を持つために狩猟されやすかったこと、また、ツンドラ地帯で導入されたトナカイの放牧がハクガンの繁殖環境を破壊したことなどがハクガンの群れをアジアから消滅させたと考えられている。そこで、1993年より、ウランゲル島で繁殖している群れを人為的に分散させる形で、アジアで越冬する個体群を復元させようという計画が、日・ロ・米の研究者などによる国際共同計画として実施されている。この計画の目的は、アジアに一か所だけという危険な状況にあるウランゲル島の集団繁殖地をかつてのように北極海沿岸部に分散させ、同時に、日本を含む東アジアで越冬する個体群を復元させることである(Sabano *et al.* 1996, 佐場野 1997)。

1993年に、ウランゲル島の繁殖地でハクガンの卵を100個採集し、日本に渡ることが知られているマガンの繁殖地である北東シベリアのアナディリ低地に移送した。そこで、41個の卵はマガンの巣にあった卵と入れ替えられ、他の43個は孵卵器で孵され、足環標識をつけたうえでアナディリ低地のマガンの繁殖地内の沼で放たれた。北東シベリアと日本の間を往復するハクガンの渡りの道を復元させるために考えられた手順である。翌年、1994年の繁殖期には、マガンの親に連れられたハクガンの幼鳥がアナディリ低地に戻っているのが確認された。また、1996年夏にはアナディリ低地から南へ100kmの地点で、標識付きのハクガンが番を形成し幼鳥4羽を連れてるのが発見されている。また、越冬地である日本と韓国でも標識付きのハクガンが1例ずつ観察されていて、移送されたハクガンのヒナが渡りを学習し、繁殖するまでになっていることが確認された。

図は、過去40年間のハクガンの日本への飛来状況をまとめたものである。復元計画が開始された1993年を境に飛来数が増加し続けていることがわかる。2007年以降の増加



が顕著であるが、地球温暖化に伴い繁殖条件が良好になってきていることを背景に、順調に繁殖が進んでいることがうかがえる。今後は、日本に飛来しているハクガンの繁殖地を明らかにすること、ウランゲル島からの移送を再開することなどが課題である。また、ハクガン同様、マガン、シジュウカラガンも、近年、飛来数が増加している。一方で、国内のガン類の生息地の数は減少しており、限られた生息地へのガン類の一極集中を招いている。ねぐらとなる広い水面と、採食できる耕作地や草地を兼ね備えた環境を広めていくことがもうひとつの課題である。



写真4. 新潟県朝日池での越冬群。 [Photo by 池内俊雄]

6. 引用・参考文献

星子廉彰.1997. 日本におけるオオハクガン *Anser caerulescens atlantica* の初記録. 山階鳥研報 (J.Yamashina Inst. Ornithol.), 29: 108-110.

Mowbray, T.B., Cook, F. & Ganter, B. 2000. Snow Goose *Anser caerulescens*. In The Birds of North America, No.514 (A.Poole and F.Gill, eds.). The Birds of North America, Inc., Philadelphia, PA.

Sabano, Y., Uemura, S., Iwabuchi, S., Kurechi, M., Andreev, A.V., Kon-dratyev, A.D., Syroechikovskiy, E.V., Litvin, K.E., Baranyuk, V.V., Takekawa, J.Y. & Orthmeyer, D.L., 1996. Restoration of Lesser Snow Geese *Anser caerulescens caerulescens* to East Asia: An International Conservation Project, *Gibier Faune Sauvage, Game wildlife*, 13, Septembre: 1181-1190.

佐場野 裕. 1997. ハクガン—もういちど、東アジアにこの群れを。私たちの自然(日本鳥類保護連盟). 38: No.427.18-21.

佐場野 裕・上村 左知子・呉地 正行. 2012. アオハクガン *Anser caerulescens caerulescens* (blue morph) の日本初記録. 山階鳥学誌 (J.Yamashina Inst. Ornithol.). 43: 177-183.

Takekawa, J.Y., Orthmeyer, D.L., Kurechi, M., Sabano, Y., Syroechikovskiy, E.V., Litvin, K.E., Baranyuk, V.V., & Andreev, A.V. 1994. Restoration of Lesser Snow Geese to East Asia: A North Pacific Rim Conservation Project. *Transactions of 59th North American Wildlife & Natural Resources Conference* :132-145.

執筆者

佐場野 裕

日本雁を保護する会ハクガン復元計画担当の他、「蒲生を守る会」、「仙台湾の水鳥を守る会」の活動にも参加。今は、東日本大震災で変わり果てた干潟や海岸の生態系の推移を見守ることに全力をあげている。写真は震災後の蒲生干潟にて。



活動報告

バードリサーチ調査研究支援プロジェクト 2012年度支援結果のご報告

ご協力ありがとうございました

バードリサーチ調査研究支援プロジェクトへのご協力、ありがとうございました。3月20日に投票結果のとりまとめを行ない、各調査・研究プランの実施責任者宛てに支援金の送金連絡を行ないましたので、ご報告いたします。

会員の皆様にもメールやニュースレターでご参加を呼び掛けたほか、年報をご送付する際にパンフレットも郵送させていただきました。生態学関係のメーリングリストや鳥関係のメーリングリスト、Twitterでも呼びかけを行ないました。また、バードウォッチングの専門店Hobby's Worldや浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館、千葉県行徳野鳥観察舎、谷津干潟自然観察センター、神奈川県立生命の星・地球博物館、相模原市立博物館、滋賀県立琵琶湖博物館、大阪市立自然史博物館などでパンフレットを配布していただきました。この他、多くの方にクチコミで宣伝していただきました。ご協力いただいた皆さまに深くお礼申し上げます。

今年の特徴は、支援先を決めずにご寄付いただいたものが多かったことです。2年目ということもあり、皆さんに仕組みを理解していただけたということのほか、どの調査研究プランも甲乙つけがたいのでみんな応援したい、という皆さんの思いが込められているのではないかと！ご投票・ご寄付いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

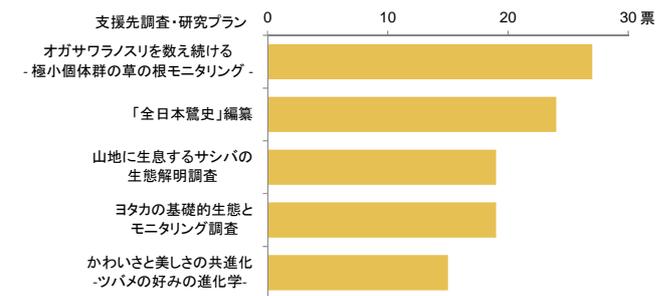


支援額が決まりました

その結果、2012年12月20日から2013年3月15日までに、200票の投票があり、62万5千円の支援金を集めることができました。このうち、2割を8件の調査・研究プランに均等割りて分配し、8割を得票数に応じて分配し、各調査・研究プランへの支援額を確定しました。得票数の状況は、随時ホームページで情報発信しましたが、オガサワラノスリ、ヨタカ、サシバが安定して得票を重ねていく展開でしたが、終盤に鷲史編纂がスパートをかけ、ヨタカとサシバを追い抜いて2位に入りました。唯一昨年度から引き続き支援することになった千葉夕佳氏と千葉勇人氏の調査・研究プラン「オガサワラノスリを数え続ける 一極小個体群の草の根モニタリング」が、27票を獲得し、トップの座を死守しました。この他、上位陣の獲得票数は図のとおりです。

バードリサーチとしては、支援先と寄付者をつなぐため、メーリングリストの設置に協力したり、全国からの情報収集など金銭面以外でも各調査・研究プランの活動を支援していく予定です。また、各支援先には、1年後に活動成果のご報告をお願いしています。楽しみにお待ちください。

【高木憲太郎】



図書紹介

鳥 優美と神秘、鳥類の多様な形態と習性

コリン・タッジ著 黒沢令子訳 /シーエムシー出版 定価 3000円(税別)

著者自身が「鳥をみることに喜びを感じていることが伝わってくる作品です。鳥に関心を持ち、感覚を研ぎ澄ませれば、自然の意味に気づき、人生観も変わってくるだろうとタッジさんは言っています。

この本は次のように構成されています。①鳥の特徴、②進化 ③分類 ④世界の鳥類 ⑤採食生態 ⑥渡り ⑦繁殖生態 ⑧性と社会 ⑨行動学(鳥の心)。鳥類学がどのような紆余曲折を経て発達してきたのか、そこにはどんな論争があったのかなど紹介されます。有名な研究のきっかけやその成果がわかりやすく解説され、面白いエピソードなども添えられています。そして、最後の章は、「鳥と生



き、鳥から学ぶ」です。ここでは絶滅問題が取り上げられています。1億4000万年の間に起きた平均絶滅率は1000年に1種。この400年の間には5年に1種の割合になっているといえます。坂を転げ落ちるようなこの状況をどうしたら止めることができるのでしょうか。科学の力への期待と不安。ここからの脱出口はどこなのか。このあたりの書きぶりに、著者の熱い気持ちが感じられます。

ちょっと斜に構えている所もあるけれども、実は情熱的な物知らぬおじさん、そんなタッジさんにお話を聞かせてもらっているように読み進めることができるでしょう。

490ページに及ぶ厚い本でも、わりとすらすら読める背景には、鳥類の研究者でもある黒沢さんの翻訳の力によることも大きいです。丁寧に言葉を選んで訳されているうえ、言葉だけでは難しいと思われるような骨格や器官の解説の箇所では、黒沢さん自らがイラストを描いています。鮮やかなオウムの表紙を見つけたら、手に取って読んでみてください。お勧めします。【加藤ななえ】

参加型調査

今年もやります！季節前線シギチドリ

守屋年史

今年の春も、シギ・チドリ類の初認調査をおこないます。昨年は、43名の方から154例の報告をいただきました。本当にありがとうございました。今年は、ホウロクシギやコチドリなどが、すでに各地で観察され始め、やや初渡来が早いのではないかとという話も聞かれます。昨年度とどのような違いがみられるか興味深いところです。

初認調査の対象としている種は、メダイチドリ、ムナグロ、キョウジョシギ、トウネン、アオアシシギ、キアシシギ、チュウシャクシギの7種です。昨年、報告された観察日と観察地から等高線を引き、渡来の波を見たところ4月に入ってから、ムナグロ→メダイチドリ→トウネン→キョウジョシギ→チュウシャクシギ

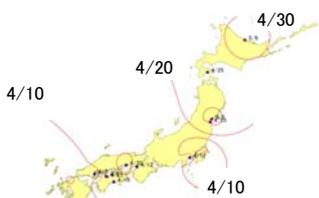


図. 観察日と観察地から季節前線を描画(2012年春のトウネン).

→キアシシギの順で、日本を移動していった様子がみてとれ、最も遅いキアシシギでも初渡来の波は5月中旬頃には北海道オホーツク沿岸に到達していました。また、各種とも九州に来てからは、関東辺りまで時間差なく渡来しているような印象でした。これは、飛翔能力の高いシギ・チドリ類の特徴なのかもしれません。ただ、アオアシシギについては、越冬の記録が関東まであり、初認記録がその間にあるので、はっきりした渡りの波の判別がつきませんでした。越冬地の北限についても気象との関係が考えられます。渡りとは別に越冬地の記録もまとめていきたいと思っていますので、越冬期に確認した報告もおまちしています。



写真. ムナグロ.

干潟が少ない日本海側では太平洋側とまた異なるかもしれませんが、水辺の少ない内陸を移動していると考えられるムナグロも記録を積み重ねることで、渡りの様子がより正確に把握できるのではないかと期待しています。ご協力よろしくお願いたします。

■ 季節前線シギチドリ のホームページ
<http://goo.gl/IFkUC>

お知らせ

バードリサーチが認定NPOになりました

3月5日にバードリサーチは東京都から認定NPOとして仮認定されました。NPOはたくさんありますが、その中でも公益性の高い団体が認定されます。バードリサーチは、東京都で25団体目の認定となりました。

認定により何が変わったのかというと、バードリサーチへ寄付いただいた方が税制面で優遇を受けられることです。これまでは寄付いただいても、寄付者に対する税制的優遇は何もありませんでしたが、3月5日以降にいただいた寄付は、所得控除あるいは税額控除の対象となり、確定申告の際にどちらか得な方で申告することができます。

企業の場合も、寄付金の損金算入が可能になりました。バードリサーチでは、昨年からの研究支援プロジェクトやツ

所得控除

$$\text{寄付金合計額} - 2000 \text{円} = \text{所得控除額}$$

もしくは

税額控除

$$\text{寄付金合計額} - 2000 \text{円} \times 40\% = \text{税額控除額}$$

いずれも寄付金合計額は所得の40%が上限

図. 寄付行為に対する税制の優遇.

バメの里親募金など、寄付によるプロジェクトを始めています。この認定を機に、ますます活発に活動してけたらと思っておりますので、引き続きのご協力よろしくお願いたします。【植田睦之】

バードリサーチニュース 2013年3月号 Vol.10 No.3

2013年3月30日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
 〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
 TEL & FAX 042-401-8661
 E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: ベニヒワ